居住空間デザイン研究室

Living Space Design, Art and Architecture Lab.

郡 裕美

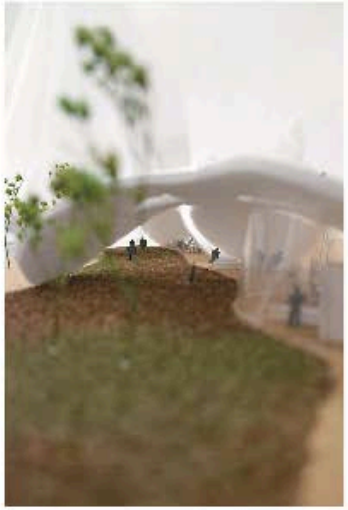
KORI, Yumi / Professor

花めぐりの湖岸駅　船と自転車で楽しむ琵琶湖

Boat & Bicycle Stations in Lake Biwa

琵琶湖の湖岸沿いに船と自転車の駅を提案する。デザインは、その駅のある市の花をモチーフとした。

現在、琵琶湖を船で遊覧する「ミシガンクルーズ」や、琵琶湖一周サイクリング「ビワイチ」が盛んに行われている。しかし今これらは観光客が主な利用者である。そこで私はそれらの二つの乗り物を日常の移動手段として取り入れることで、いつもとは違った町の見え方や空気に触れられ、充実した特別な時間になるのではないかと考えた。船と自転車を新たな交通ネットワークの軸とし、今まで繋がらなかった地域同士を結び、人と人との新しい交流を生み出す提案である。



秋武 いくみ
AKITAKE, Ikumi

呼吸する深空　都市に建つ温浴施設の提案

Ascent to Agravity: Bathhouse in the City

入浴は私たち人間の生活に欠かせないものだ。昔は公衆浴場が多くあったが、今はユニットバスやスーパー銭湯などが現れ、入浴を楽しく手軽にした。現代は便利になった反面、情報過多や多意見、ハラスメントなどの問題があり、精神的な、思考による疲労を生み出している。この精神的疲労は、身体的衛生環境を整えることに特化した今の入浴施設では解消が難しいと感じる。精神的疲労を解消するには、以前の考え方に固執することを止め、「自身も他人も常に変わりゆく存在である」という考えを持つことが大切だと思う。これは禅宗・能楽から見出すことができ、この思想を入浴空間に落とし込むことで、現代に合った癒しの空間ができるのではと考えた。大阪の北船場に、ルーティンワークに気づきを与え、気持ちの切り替えができる温浴施設を提案する。

河野 佑貴

KONO, Yuki

だんじり小屋が生む新しい繋がり　大阪堺市鳳の賑わいを取り戻す

New Connection Created by Danjiri Shed: Regaining its Vigor of Osaka Sakai Otori

「だんじり」と聞くと皆さんはどこの「だんじり」を思い浮かべるだろうか？　多くの人が「岸和田のだんじり祭り」を思い浮かべるだろう。私が住んでいる町、鳳でも「だんじり祭り」が行われている。鳳の「だんじり祭り」は400年前から行われており、その歴史は最も古く、発祥の地と言われている。鳳に住む人にとって「だんじり祭り」は特別な存在であり、祭りが近づくにつれ町中の人がワクワクし出す。祭りの際は「だんじり」を見ようと町中の人が町を歩く。神社の出店に行ったり、「だんじり」と一緒に走ったりと鳳が一年で一番盛り上がる時である。

鳳には町を分断する線路が通っている。祭りの際は関係なく町中を往来し、人で溢れかえる。しかし祭りが終わると線路を越えることが減り、町中を歩くことがなくなってしまう。

そこで祭りがない時でも町を歩いてもらえるよう日常でも町の人が「だんじり」を感じ、楽しく町を歩きたくなる町を目指す。

近藤 創真
KONDO, Soma

住まう、働くをつなぐ「間」 ——新旧が出会う中崎町で考える

Connecting Living and Working by Ma in Nakazakicho

人の暮らしと共に働き方も大きく変化してきた。これまでの「働く場」と「生活の場」が分離された関係から職住近接の関係が増えてきている。すると住まいのあり方も変わってくる。そこで私は職住一体の集合住宅を提案する。

敷地は大阪、中崎町。この町には築100年以上の古民家が多く残っている。また、古民家を改修し、お店を構え、古き良きものはそのまま残して、そこに新しいものを取り込んでいく。そうして古いものと新しいものが、住むと働くとが混じり合う土地でより「生活」と「働く」とをより密接に、生活の中心である居住空間に働く場を組み込むことで「働く」から町のコミュニティの中心となるような集合住宅を考える。

佐藤 雄基
SATO, Yuki

波間に現れる光明の兆し　獲る、商う、食す、学ぶ魚市場

Light in the Waves: Fish Market for Fishing, Trading, Eating, and Learning

近年、益々問題視されるようになってきた水産業。乱獲や人々の活動に伴う水質環境の悪化や地球温暖化などによって海の生物が生活する環境は悪くなる一方である。また、漁師の後継者不足や魚離れによる食文化衰退の危惧など、安全で充分な水産資源の獲得、食文化の伝達がこれからの重要な課題であり日本の水産業を取り巻く状況は大きな転換期を迎えている。

しかし、この問題をよく知るのは水産業に関わりのあるごく一部の人だけである。関係者以外の人々はこれらの問題をニュースなどで見ることはあっても軽視していて、普段の生活では事の重大さを知る機会はほとんど無い。

よって水産業を身近に感じてもらうためには食の魅力だけでなく、魚との触れ合いや実際の水産の仕事を体験できるような施設が必要なのではないかと考える。魚食の情報を開示するとともに漁師の後継者獲得や水産資源の保全に向き合うきっかけとなるような魚市場を提案する。

杉村 紘平
SUGIMURA, Kohei

食べるを楽しむ　淡路島の田園風景に大屋根と縁側を創る

Enjoy Eating: Creating Large Roof and Engawa in Rural Scenery in Awaji Island

人は料理をして誰かと一緒に食事をとる
“共食”する生き物だといわれているが、
今では“孤食”の時代といわれている。
それは大人だけに限らず、こどもにも影響している。

見えない“食”の貧困は、いつも同じものを食べる
“個食”や食事を抜きがちな“欠食”など
他にも様々あるが、問題視されにくいのが現状である。

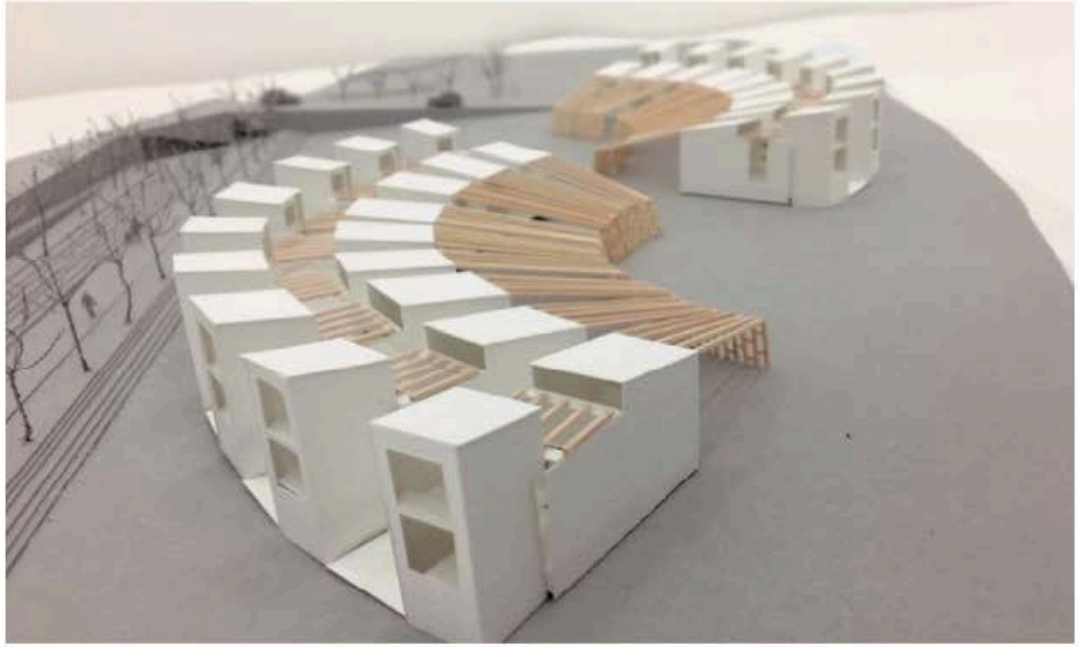
そこで、こどもや保護者、地域の人々が
集まり交流することのでき、
地域のつながりを生む「こども食堂」を提案します。

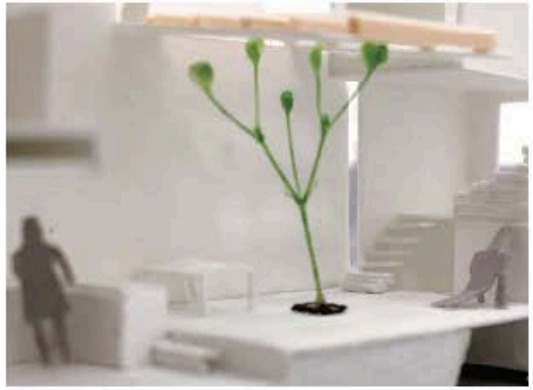
瀧川 桃花
TAKIKAWA, Momoka

自然の一部を日常に　日常で自然を感じる集合住宅

Inviting Nature to Daily Life: The Apartment Complex Incorporated in Nature

何気ない1日の生活を過ごす中で、
一度でも自然に触れたことがあっただろうか。
都心に出れば何でも揃い何でもできる、
良くも悪くも殺伐とした今の時代。
そんな時代に、帰る場所に自然があったら。
朝、目を覚まし、そこに自然があったら。
殺伐とした日常が
もう少し穏やかなものになるかもしれない。
自然の光や風や季節のうつろいを
身近に感じることができると同時に、
生活の場面ごとに変化する
家族の豊かな関係をつくり出したい。
そこで一本の木を、日常生活の一部に取り込んでみた。

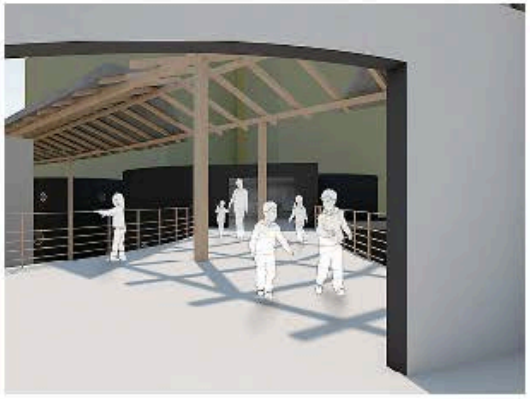


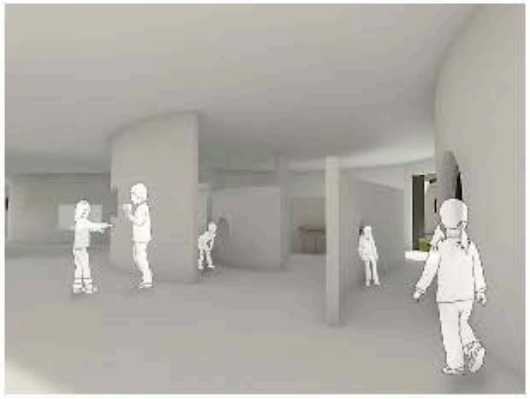


谷 かの伽
TANI, Kanoka

ほうかごあーけーど　商店街を子どもの居場所へ

After-School Arcade: Transforming Shopping Arcade into Space for Kids





かつて、自由で伸び伸びと過ごしていた放課後は、大きく変わってきている。

両親共働きの一般化や、母子・父子家庭といった環境の増加。忙しく習い事に行く子供や、学童保育で、限られた子供たちと決まった場所での保育など、本当に子供たちにとって楽しく幸せな時間なのだろうかと考えた。

また、田舎はともかく、都会に暮らす子供たちは、公園での禁止事項が増え、町での子供の居場所が減ってきていることも今回のテーマにつながる。

今より自由で豊かな体験ができる放課後の提案として、商店街を敷地に子供の居場所を貫入し、従来とは異なる景色を町に広げる。

谷江 勇樹
TANIE, Yuki

たゆたふ　米所・三木のくらしのこれから

TAYUTAU: Futurity in Miki City, Famous Rice-Producing Area

『ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず……。』

世の全てのものは常に移り変わり、いつまでも同じものは無いという無常観を表した方丈記の冒頭文である。生き物、もちろんヒトの体も、常に細胞は入れ替わっており微視的にみると河のように、流れそのものである。生命のように流れ、揺らぎ続ける建築を考えたい。

対象地は、兵庫県三木市。酒造好適米・山田錦の名産地だが、高齢化による後継者不足が問題だ。都市住民の田園回帰を足踏みさせる原因は農家との交流の不安と、技術不足を解消する地元農家を先生とした米農家学校兼集合住宅を提案する。

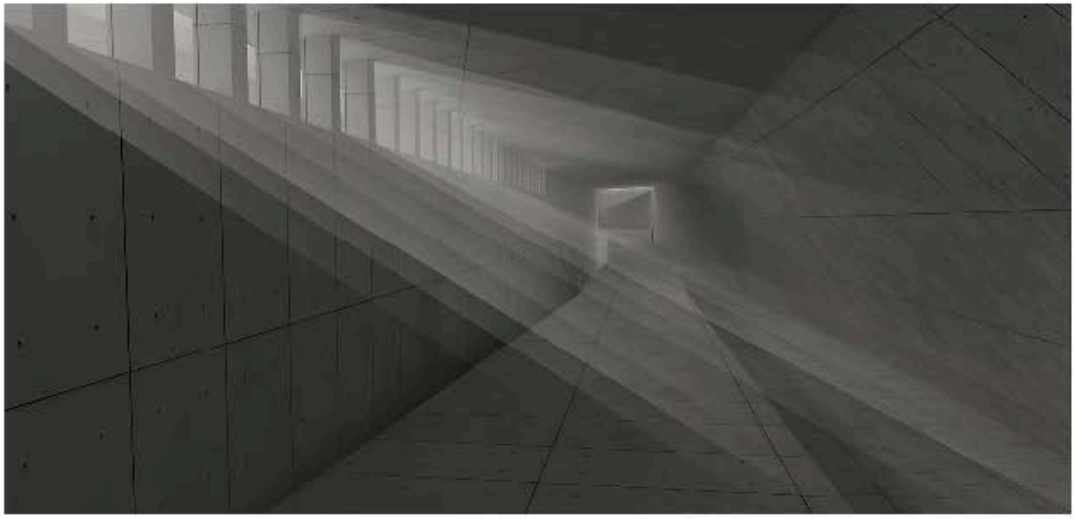
手法として生命の特徴である「相補的関係」「動的平衡」を導入する。生命のように建築を分解し未完結な状態にすることで機能に縛られない空間が知覚される。

「たゆたふ」とは揺れ動いて定まらない状態を表す古語である。生命的な未完の建築は複雑な関係の中で、たゆたふ。

中村 翔太
NAKAMURA, Shota

存在の刻印　消えゆく集落の記憶を遺す

Evidence of Existence: Leaving Memories of Disappearing Villages



日本の集落は高齢者の割合が高い集落が増加していることから、維持困難な集落が多くなってきている。京都市北区に位置する真弓集落もその1つで、北山杉を扱う林業の村で世帯数 10ほどの限界集落である。消えゆく集落がそこにあったという集落の記憶が建築を通してその地に残るための空間の提案をする。

この提案は集落に人がいなくなってからもその地に痕跡を残すことでその集落の存在を次世代に語り継がせる計画である。集落の存在を人の記憶や紙面の記憶だけで残していくのではなくそこにあった存在を新たな形として人々の記憶に刻む。

永田 詩歩
NAGATA, Shiho

発酵と寄生と増殖と　大阪駅前ビル更新計画

Fermenting, Parasitizing and Multiplying: Transformations of Osaka Station Buildings

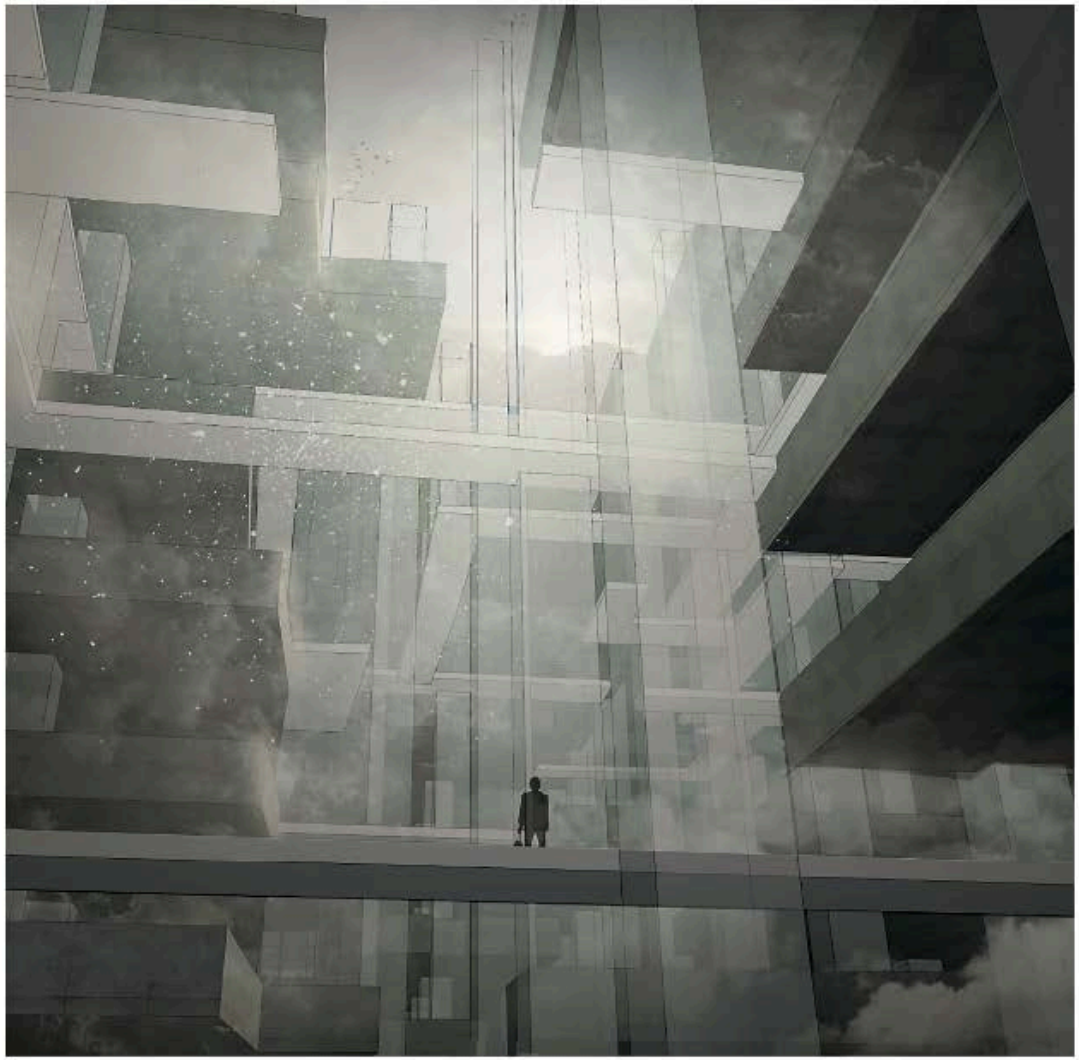
大阪市梅田一丁目。西日本最大の都市と呼ばれる所以は駅前開発に端を発する。戦後から続く町は今ほど規制はなく住居不定、在日外国人の不法占拠、様々な背景を抱えた人々が軒を連ねていた。

1960年、高度経済成長期の波が街の姿を一変させる。近代化に伴い逸る世界では効率と合理性が求められ、難航する立ち退き整備に、区分所有ビルという方針が決まった。

豊かに活動していたバラックの小さな力たちは、時代の変化に勢いづいたオフィスビルという大きな力に蔑ろにされてしまう。

流れる時代の中でビルを取り巻く環境も変わる。差し迫る耐用年数、坪単価の低下、そもそも建築プログラムの逸脱、区分所有ビルが足かせとなっている。

代謝されるべき都市空間において不適合な空間が健全な代謝システムを停止させてしまった。

地下には小さな力たちがわい雑に押し込められている。迷路のような路地、賑わう商店街のような楽しさ。上物の廃れた世界とは真逆世界の空間がこの時代に表出し、凋落した都市空間を更新してゆくだろう。

嶋田 陸
SHIMADA, Riku